



うなぎ

散策後は諫早名物「うなぎ」に舌鼓。諫早では、かば焼きを二重底の楽焼の器で蒸すため、ふっくらとろけるような味わいが楽しめる。

諫 早家の菩提寺である天祐寺。こちらを訪れる際は駐車場側からではなく、ぜひ正門から入ってほしい。しつとりとした情緒豊かな庭を愛でながら長い参道を歩くと、石段が見えてくる。その先には山門と両脇に真っ赤な仁王像。そして一気に視界は開け、青々とした緑

と威風堂々たる本堂が迎えてくれる。境内には大きなイチヨウの木が立ち、秋には黄色の絨毯が見られるという。今回は特別に住職の須田哲成さんに本堂を案内していただいた。須田さんが中庭に通じる障子を開けるたびに、思わずため息がもれる。それほどまでに天

祐寺の中庭は美しく、そこには外からは伺い知ることのできない世界が広がっていた。「この美しい庭を諫早市民の方にもっと知っていただきたいと思い、ご住職にご協力いただいて書院で定期的に座禅会を開催しています。初めてご覧になる方は本当に感動されますね」と菊山さん。書院は元々、諫早家の屋敷にあった建物で、大正時代に諫早家が法事を営むために寺に寄進したものだという。丸窓からの絵画のような風景や長崎の

南画家・木下逸雲が描いた襖絵など、見るもの全てに心を奪われた。本堂や書院は紅葉が美しい時期に限定公開しているという。

北九州市からの移住者である菊山さんは、諫早の魅力をこう話す。「市民の暮らしの中に歴史や自然など、価値あるものが溶け込んでいてとても素晴らしいと思います。例えば、諫早高校はかつて家晴公の壮大な屋敷があった場所なのですが、高橋生たちが御書院のベンチで休んでいた、山城址がウォーキングのコースになっていたり。地元の人は『何もない場所』と言いますが、そうした歴史や文化を当たり前のようには享受しながら暮らしているのは贅沢なことだと思います」。

風土は人を作る。諫早は優れた作家や詩人、脚本家等を多く輩出しており、諫早公園周辺では文学碑や顕彰碑がいくつも見られる。彼らが残した諫早を舞台にした数々の名作は、時を越えて今なお読み継がれている。この地の豊かな歴史や文化は確かに人の心を育む力があつた。

歩けば歩くほどに 開ける新たな世界



天祐寺

本堂や書院では時間がゆっくりと流れる。



天祐寺には回廊があり、庭をぐるりと取り囲んでいる。



木下逸雲による襖絵は圧巻。



諫早市美術・歴史館

諫早市美術・歴史館では諫早の歴史資料をはじめ、野口彌太郎など諫早にゆかりのある作家の美術作品などが展示されている。